

## 人文学で未来を切り開く

### ——フランス語圏文化研究を用いたケースメソッド教授法の展開可能性——

高橋梓<sup>†</sup>

松井真之介<sup>††</sup>

山川清太郎<sup>†††</sup>

本ワークショップでは、現代フランスの政教分離問題を日本風に翻案し、近未来の日本社会で起こりうるコンフリクトの疑似体験を試みた。ケースメソッド型ワークショップはコンフリクトの疑似体験を可能とするため、ステークホルダーとの関係構築のためのシミュレーションとして効果が期待できる一方で、ICPカンファレンス2018で実践したワークショップにおいて参加者の関心は直接的な利害関係者に集中していた。そこでICPカンファレンス2020では今後起こりうる社会を想像することで、現在自分と直接関係のないステークホルダーを意識する能力の開発を目指すと共に、フランス語圏文化研究の知見に基づく解決方法の模索を経ることで、人文学の習得こそがSDGsの達成に寄与するという仮説を検証した。

【キーワード：ケースメソッド、フランス語圏文化、政教分離、ステークホルダーの可視化】

#### 1. はじめに

本研究チームはイノベティブ・クラスルーム・プラクティス（以下ICP）カンファレンス2018においてワークショップ「社会を生き抜くための人文学——フランスを用いたケースメソッドの可能性——」を実施した<sup>1</sup>。この試み

<sup>†</sup> 近畿大学准教授

<sup>††</sup> 宮崎大学准教授

<sup>†††</sup> 京都先端科学大学非常勤講師

<sup>1</sup> 高橋梓、松井真之介、山川清太郎「社会を生き抜くための人文学——「フランス」を用いたケースメソッドの可能性——」、『2018年度言語メディア教育研究センター年報』、神田外語大学、pp.133-155、2019年。

は、社会的コンフリクトの疑似体験と人文学（フランス語圏文化研究）の講義を結びつけるものである。ワークショップ参加者は「ケース」に書かれる架空の事件（パワーハラスメント）の当事者となり、講師（高橋・松井・山川）の提示する人文学のレクチャーの中から問題解決のヒントを探り出して、チームとして対策を考案・発表する。この実践は昨今の実学教育と教養教育の二項対立を目指すものであるとともに、参加者に人文学を通じて社会構造の問題の把握と改善に向けた具体的な提案を促すものであった。いわば本ワークショップは多様な個人と結びつく多様なステイクホルダーの存在を可視化し、「誰一人取り残さない世界」という理念を再確認させる点において、SDGs 教育の実践プログラムとして位置づけられるものである。

しかし ICP カンファレンス 2018 での実践を経て、執筆者は本ワークショップの問題を実感することとなった。ワークショップ参加者自身による振り返り（リフレクション）には、フランス語圏文化研究の社会的意義への気づきなどが記載されているが、他方で参加者が提案するハラスメント問題の解決法の大半が「飲み会を設ける」「職場の先輩に相談する」等の一般論に終止しているのである<sup>2</sup>。むろんこれらはハラスメント問題の当事者の解決法としては妥当なものであろう。だがそもそも本プロジェクトは社会的コンフリクトの当事者意識の醸成と、問題解決に向けた推進力を開発することを目的とする。その観点において、参加者が提示する解決策はコンフリクトの構造を放置し、自分だけがすり抜けることを目指すものと言わざるを得ない。それはすなわち自己の周囲に潜む多様なステイクホルダーを可視化できないことを意味する。この結果を受け、SDGs 教育を目指す本プロジェクトは改善を迫られることとなった。

ICP カンファレンス 2020 オンラインにおいて執筆者たちが試みたのは、これまで使用してきたケースの根本的な変更である。本プロジェクトでは社会問題の当事者へのヒアリングにより、ハラスメントやチーム内の不和といったアクチュアルな問題のストーリーを構築してきた。だが言い換えるとそのような問題は参加者たちにとって当たり前のように存在するものであり、それゆえに社会構造の捉え直しを行うことが困難となるのではないかと推察される。そこで我々は、参加者にとって当たり前ではない問題、すなわち現代日本では生じていない社会問題のケースの作成を目指した。そのために着目したのが、執筆者

<sup>2</sup> 前掲報告書、p.156。

たちの研究対象であるフランスの宗教問題である。

周知の通り、20 世紀初頭のコンブ内閣に始まる政教分離政策（ライシテ）は、フランス社会の基本的な価値観の一つである<sup>3</sup>。公教育の場における宗教色の排除は、むしろ日本では見られないことだが、本ワークショップではこれを未来の日本社会の出来事に翻案したケースを作成した。以下、ICP カンファレンス 2020 におけるワークショップ実践を詳述し、この新たな試みの成果と課題を検討することで、SGDs 教育プログラムの開発に向けてのさらなる改善案を提示したい。

## 2. ワークショップの手順

本ワークショップはオンライン版として ZOOM 上で行った。基本的な進行手順は以下の通りである。

### 【I. 導入】

自己紹介、趣旨説明

### 【II. 知る作業①】

ケース読解

全体共有

### 【III. 知る作業② ジグソー法】

ブレイクアウト（1）を使用し、3 グループに分割してレクチャー受講

ブレイクアウト（2）で別グループに再編し、各レクチャーの共有

### 【IV. 作る作業】

ブレイクアウト（2）でプレゼンの準備

メインルームでのグループプレゼン

### 【V. 総括、リフレクション】

講師による総括、Google フォームでのリフレクション

<sup>3</sup> 林瑞恵、「ライシテ」、『現代フランス社会を知るための 62 章』（三浦信孝、西山教行編）、明石書店、2010 年、p.239。

(各セクションの詳述)

## 【I. 導入】～【II. 知る作業①】

ICP カンファレンス 2020 では 11 名の参加者を迎えた。アイスブレーキングとしての簡単な自己紹介とワークショップの基本的な流れを紹介した後、チャットにてケースを配布し、10 分で読解してもらう。ケースの内容を整理できるよう、「設問 1」で内容理解を課し、読会終了後に参加者に報告をさせることで、スムーズな全体共有を目指した。

---

## 【実際に使用したケース】

### ある学校のライシテ

舞台は 2031 年の日本。自国第一主義が吹き荒れた 2010 年代から、コロナウイルスによって引き起こされた各国の分断の反動のように、世界は急速にリベラルへと向かいつつあった。日本では自民党が下野し、新生民主党が第一党となる。新政権はフランスの人権思想を規範とした教育改革を徹底し、公立の学校機関では宗教色が排除された。しかし宗教をアイデンティティとする人々は、子供たちにあえて宗教的な服装を身につけさせることで、日本各地で問題を起こす。そんなある日、熱心な B 教信者の両親を持つ少女、興梠由香里が県立池田高校に転校してくることになった。2 年 C 組の担任である緒方は、由香里の母親から「転入初日は法被を着てくる」と宣言を受けていた――

興梠由香里の転校当日、緒方はいつもより早めに出勤し、職員室で待ち構えた。彼女が母親の予告通り法被を着て登校したら、そのまま職員室で指導に入る手はずだった。だが、ショートホームルームの予鈴が近づいても、由香里が現れない。誰も現れないまま、予鈴が鳴る。

仕方なく緒方は教頭に状況を告げ、2 年 C 組のクラスに向かった。いつにな

くクラスの中が騒がしい。悪い予感がした緒方は、落ち着きを取り戻すようにゆっくりとドアを開けた。その目に飛び込んできたのは、黒い法被を着た少女を取り囲むクラスの生徒たちの姿だった。興梠由香里と思われる生徒が、クラス委員の齋藤絵梨と楽しそうに話しており、そこにクラスの大勢が集まっている。

「由香里ちゃん、全然変わってないじゃん！」

「てか、絵梨もでしょー！」

「でもホントにうちのクラスなんだね。ウケる！」

周囲が笑いに包まれる。緒方は思わず大声を出した。

「皆さん、ちょっと静かにしてください！」

ざわめきが止まり、クラスの視線が緒方に向かう。絵梨が慌てて自分の席に戻り、他の生徒も本来の場所に戻っていく。

「興梠さん……ですね」

「はい。すみません、職員室の場所がわからなくて、絵梨さんに聞こうと思ってクラスに来たんですけど、つい話し込んで」

悪びれず話す由香里は、茶に染めた巻き髪と華やかな顔立ちで、弾けるばかりの笑みを浮かべた。思わず緒方は絵梨を見る。

「先生、由香里は小学校のときの友達なんです。久しぶりに会ったからちょっと嬉しくて、失礼しました」

由香里とそっくりな流行の髪型をした絵梨の笑顔に、緒方ははっきりとたじろいだ。

「いや、それはいいんだけど、まずは職員室に来てくれないと……」

口ごもる緒方に、絵梨が続ける。

「すみません、やっぱりインフルエンサーが転校生ってことで、みんなも盛り上がっちゃって」

「インフルエンサー？」

緒方は思わずオウム返しで答える。

「あれ、知らないんですか？由香里のフォロワー数ってすごいんですよ。この髪型も由香里のマネだし」

「私もー」「かわいいー」といった声がクラス中に溢れる。その空気に翻弄され、緒方は自分でも驚くほどの大声を出した。

「静かに！興梠さん、その服装！」

自分でもわかるほどうろたえながら、緒方は由香里の黒い法被を指さす。由香里は笑顔を変えず、答えた。

「あ、すみません。髪型と服装は自由って言われたんで」

新政権になってから、女性の権利や学校内の自由が推し進められ、制服を廃止し、髪型や化粧を自由にする学校は増えている。だが、それには例外がある。

「政教分離です！すぐに職員室に来なさい！」

緒方の怒鳴り声に由香里は臆することなくうなずいて、緒方を先導するように廊下へ向かった。まるでこんなことにはすっかり慣れていると言わんばかりの態度だ。人気インフルエンサーの転校生に向かって怒声を挙げ、外に連れ出そうとする緒方を、クラスの面々が敵意を持った目で見つめてくる。その視線に耐えきれず、緒方は由香里を追って教室を後にした。

職員室に併設する面談室で由香里との面談が始まった。緒方の横には教頭と、二年生の学年主任が座っている。教員側の緊張した表情に対して、由香里は落ち着いて微笑みを浮かべている。

最初に口を開いたのは教頭だった。

「興梠さん、それはB教の法被ですね」

「はい、まあ、そうかな」

軽く答える由香里に、教頭はいらだったような声で続ける。

「政教分離については当然知っているよね。公立高校では宗教を感じさせる服装は認められません」

「そうみたいです」

「ですから、今日はその法被を脱ぎ、明日からは着てこないようにしてください」

由香里は教頭の言葉にゆっくりとうなずきながら、相変わらずの微笑みを浮かべ、答えた。

「コーデです」

「コーデ？」

学年主任が繰り返す。

「これ、法被というか、ファッションですよ」

「え？」

「第一、私はB教じゃありません」

由香里は微笑むのを止め、まっすぐに緒方たちを見つめた。

「でも、B 教の法被を着ているじゃないか」

緒方は由香里に尋ねる。

「両親は B 教だけど、私は別にあんなの信じていないし」

「じゃあなぜ法被を着ている？」

「着ていけってうるさいからですよ。これを着ていれば親子が平和なんです」

宗教の信者である両親が子供に宗教の服を着せ、面倒だから着る——興梠親子の関係が少し見えてきた。緒方はそれを受けて続けた。

「それなら学校では無理に着なくてもいいんですよ。学校に着いたら脱げばいい。家や街で着る分には何の問題もないんだから」

それを聞いた由香里の口にまた微笑みが浮かぶ。

「だから、コーデなんです。法被だってこうすれば普通の服でしょ？」

由香里は立ち上がり、法被をゆっくりと指さしていった。黒い法被には B 教のシンボルである榊の紋様が書かれている。だが、よく見るとその法被は合わせ部分にボタンがつけられ、腰の部分にベルトが付いている。法被だと思ってみていたが、よく見ると生徒が着ているアウターと同じデザインだ。

「この模様、和柄だから夏の季節にインナーと合わせるとかわいいじゃないですか」

見ると由香里は法被の下に水墨画の竹のような模様が書かれたグレイの服を着ている。全体が「和」をイメージしたファッションに見えないこともない。

「親はあんな法被を着ていけって言うし、うるさいからこれを作ったんですよ。これを着ていると家でも何も言われないうし。インスタでも評判良かったから、《語らい》に関係ないときでも時々着てるんです」

そこまで言うと由香里は座り、椅子に深く腰掛けた。言うべきことは終わった、という態度にも見えた。

「……でもね」教頭が言う。「結局 B 教の法被で作ったんでしょ？ じゃあやはり宗教の持ち込みじゃないか」

「だから、私は B 教なんて興味ないです。これはただのファッションで、模様は似ているかもしれないけど B 教の人たちが来ているものとは違います。服装は自由じゃなかったんですか？」

由香里の声は少し強くなった。

「だからそれはね……」

「B 教がやってることは意味わからないし、この時期にわざわざ公立に転校させられるのも私には迷惑なんです。周りがうるさいから、せめて服を自分流にデザインし直してかわいくしたのに、それもダメだって言うんですか？」

——B 教のやっていること——政教分離で公共教育の現場から宗教色が閉め出され、法被を身にまとわないことから、子供の宗教離れが一気に進んでいった。この状況に抵抗するために、B 教は公共教育に法被で通う運動を開始した。依頼、様々な学校で法被を着た信者の子供たちが問題を起こしている。つい先月も一人の生徒を面談し、法被を脱ぐよう説得したところだった。信者にも温度差があり、緒方が面談した生徒の親などは、信者から強く言われたので「一応」やってみただけだったらしく、特に大きな問題に発展することはなかったが、全国の学校では連日のように問題が報告されている。

緒方が由香里の言い分について考えを巡らせているうちに、教頭が口を開いた。

「法被をどうしても脱ぐのが嫌なのなら、今日は帰ってください。あとでお母さんに連絡をします」

由香里はまた落ち着いた声でゆっくりとうなずいた。

「わかりました。失礼します」

由香里が去った面談室には重い空気が立ちこめていた。

朝の騒動に心を乱されながらも、その後の授業は普通に進んでいった。C 組の学生のリアクションも、いつもとさほど変わることがなかった。職員室に帰るたびに教頭の様子をうかがうが、興梠家からの連絡はまだ入っていないようだ。

午後の一つ目の授業が終わり、予定されていたロングホームルームの時間になった。本来はこの時間に由香里を交え、クラスに馴染めるようにアクティビティを行う予定だったが、そんな計画も崩れてしまった。仕方ないのでクラス委員会の案件でいくつか決まっていない部分をディスカッションさせようと、クラスに向かう。

「皆さん、今日は予定を変更して……」

「先生、由香里はもう来ないんですか？」

緒方の言葉を遮ったのは、クラス委員の齋藤絵梨だった。

「いや、今日のところは帰宅してもらっただけです」



「政教分離のせいですか？」

絵梨は続ける。

「そうだね、皆さんも知っているように、あのような服は高校には着てこれないので」

絵梨の後ろで右手が挙がった。副委員長の菱沼裕也だ。

「先生、あの服もダメなんですか？」

不服そうな裕也の顔を見て、緒方は少し戸惑いながら答えた。

「あの服も、というかB教の法被はダメでしょう」

「でもあの模様……」

裕也はぐると周囲を見渡す。その視線を受けるように、絵梨と仲のよい常磐さやかが手を挙げた。

「あの服、前に由香里ちゃんがネットに載せて、結構真似して着てる子もいますよ。私たちのあいだでは由香里ちゃんのフォロワーだけだけど。由香里ちゃん、あの服の柄をフリー素材でアップしてるから、プリントして黒い服に貼り付けたり……」

「この前スタバ行ったときに着てたよね」

クラスが急に騒がしくなる。緒方は制するように言った。

「判断は学校が行います。皆さんもあのような服を持っているなら、着てこないようにしてください」

「B教と関係ないファッションなのに？」

クラスは逆に騒がしくなる。

「B教と無関係であっても禁止です。事情に関係なく、宗教色を匂わせるものを全部やめなければ、平等は得られないでしょう」

「じゃあ先生は、いただきますで手を合わせないんですか？」

絵梨が睨みながら言う。

「いや、それは……」

口ごもっていると、別の生徒が手を挙げた。田中亮だ。

「いや、でもあの服はダメですよ？ 僕、手首の数珠を禁止されたし」

「数珠はダメだろー」

数人の男子がはやし立てる。

「でも、あれだってクリスタルでオシャレだったんだよ？ 街ではみんな普通にしてるのに、うちが寺だからってだけでダメにされたじゃないですか」

少し興奮してきたのか、亮は立ち上がって声を上げた。

「あの法被が OK なら、僕の数珠も OK ですね？ダメなら、いただきますの時に手を合わせるのも禁止してくれなきゃ納得できない。なんで僕だけダメなんですか？」

クラスの中に混乱が広がる。その騒ぎに気づいてか、隣のクラスの担任が入ってきて、二人がかりで強引にクラスを押さえた――

名前	人物説明
緒方	2 年 C 組の担任
興梠 由香里	転校生。インフルエンサー。
斎藤絵梨	クラス委員（委員長）。由香里の幼なじみ。
菱沼 裕也	副委員長。
常磐さやか	インフルエンサーである由香里のファン。
田中亮	寺の息子。

設問 1 以下の質問に答えなさい。

1. 作品の舞台において、学校教育と宗教はどのような関係にありますか？

→

2. 転校生・興梠由香里はどんな問題を抱えていますか。

→

3. 興梠由香里の問題は多くのクラスメイトに支持されました。その理由は何ですか。

→

4. 田中亮は興梠由香里を問題視しています。その理由は何ですか。

→

設問 2 緒方先生はこれから、①由香里、②由香里を支持する生徒、③由香里を支持しない生徒、④学校、⑤由香里の両親、を（部分的にであっても）納得させる必要があります。緒方先生は何を根拠として、どんな解決策を出せばいいでしょうか。講師のレクチャーをヒントにグループで意見をまとめてください。なお、緒方先生の提案はどんなものであっても必ず通るものとします。

### 【III. 知る作業② ジグソー法】

ケース読解後、参加者は「設問 2」を行うために、講師（高橋・松井・山川）によるミニレクチャーを受講する。このレクチャーは政教分離やマイノリティ問題に関連したものではあるが、解決方法を提示するものではなく、極めて専門的・学術的な内容である。あえてヒントを出さないことにより、参加者自身にフランス語圏文化に基づく解決法を捻出させることが理由だ。

参加者自身の気づきを促すため、本ワークショップではジグソー法を徹底している。参加者を三つのグループに分け、講師である高橋・松井・山川のレクチャーを聞いた後、そのグループを再編して新たなグループを作成する。以下に簡易的な図を示す。

レクチャー受講（三人ずつが各講師のレクチャーを聞く）

高橋	松井	山川
○○○	●●●	◎◎◎

グループ再編（別のレクチャーを聞いた参加者でグループを再編する）

グループ A	グループ B	グループ CC
○●◎	○●◎	○●◎

ジグソー法により、参加者は自分が聞いたレクチャーを他者に伝えねばならない。参加者がレクチャーを自分なりに咀嚼する手順を経ることで、問題解決への転用がスムーズにできるようになる。ブレイクアウト（1）でのレクチャーの時間は 10 分、その後ブレイクアウト（2）に分かれて 10 分でグループ内共有を行う。

### 【実際のレクチャー（当日のレジュメ）】

#### ① 高橋レクチャー

フランス文学（マルセル・ブルースト）における政教分離のテーマである。政教分離に反対しながらも、私的印象との結びつきで教会を愛する人間の心理を伝える内容となっている。配付資料は以下の通りである。

## プルーストと教会

講義名：ヨーロッパ文化論 A

担当教員：高橋 梓

授業内容：20 世紀フランスの小説家マルセル・プルーストの作品を学ぶ

### 1. プルーストと政教分離

引用① プルースト、「大聖堂の死」（初出：1905 年）

ところで、フランス政府がローマと断絶することで、ある法案が議論に付され、可決されそうな様子である。五年後に法案の期限が切れると、教会はひょっとすると、いやおそらくは廃止されるであろう。[...] キリストの血と肉の犠牲が教会の中で称えられなくなったとき、教会には生命がないであろう。

- 20 世紀初頭、共和国であるフランス（第三共和政）は政治と宗教を切り離す「政教分離政策」を施行する
- 1905 年には国家と教会が完全に分離される。
- 「いかなる信仰も認知せず、助成せず、給与扶助の対象としない」
- 知識人たちによる「政教分離」への賛否。

⇒ プルーストも政教分離政策に反対の立場。

### 2. プルーストの教会観

引用② ジョン・ラスキン、『アミアンの聖書』、訳者注（1904 年）

もし私がこの本質的に恭しいラスキンの言い回しの背後に絶えず逃げ込んでいたら、逆に私自身が偶像崇拜を求めるに違いなく、その罪を犯してしまうだろう。

- プルーストはイギリスの美学者ジョン・ラスキンの『アミアンの聖書』をフランス語に翻訳。
- プルーストはラスキンの「読み解くことは傲慢だと言われかねない困難さ、

私たちには解決することが求められていない神秘」「不敬な見物人にとって、後陣はほとんど大きすぎるように見えるであろう」といった文章を注で批判。

- キリ基督教建築を「神秘」などの言葉で十分に解釈しないラスキンは「偶像崇拜」、つまり「無意味にありがたがる」という罪を犯している。

⇒ 「フランスの至宝としてのキリ基督教」といった見解は、「ありがたいものだからありがたがる」という堂々巡り。

引用③ ポール・グリュヌボーム＝バラン宛書簡（1905 年）

事物は我々にとってもはや信仰の対象であることをやめ、無償の熟視の対象となったときにはじめて、我々は事物を美しいと思うのです。ただこれは私が四年ものあいだ身を浸してきたラスキンとはまったく正反対の思想です。

⇒ 宗教色を排し、ひたすら眺めることにより、事物の美が理解できる。自分自身の精神による理解。

### 3. 『失われた時を求めて』における教会の描写

引用④ 第一篇『スワン家の方へ』（1913 年）

叔母がフランソワーズとおしゃべりしているうちに、私は父母に連れられてミサに出かけるのだった。どれだけ愛したことか、そして今なお鮮明に思い出せるだろうか、私たちの教会を！

教会！親しげな教会。それは北門があるサン＝ティレール通りで、その二つの隣人であるラパン氏の薬屋とロワゾー夫人の家の境となり、間隔なく接している。コンブレーの一介の市民である教会は、もし町の通りに番地があったら自分の番地を持っていたであろうし、郵便屋は朝の配達時、ラパン氏の家から出てロワゾー夫人の家に入る前に教会で立ち止まったことだろう。

- 父母との思い出の反映。
- 教会が町に溶け込み、人々の生活の中心の場となる。

- 町の思い出に結びつく教会が親しみの感情を喚起させる。

⇒ 教会＝幼少期の思い出。フランスの文化財としての重要性などに左右されず、「無償の熟視」によって評価がなされている。

#### 4. 結論

- プルーストは政教分離政策により、教会と人々のつながりが失われることを危惧し、教会と周囲の人々の営みを作品に描き込んだ。
- プルーストは教会に宗教的な神聖さを感じ取るラスキンの態度を「偶像崇拜」と批判する。
- プルーストにとって教会は個々の精神に基づく私的な印象・記憶を集める場として意味を持つ。

#### ② 松井レクチャー

「ライシテ」というフランス特有の政教分離の歴史的背景を紐解き、それが現在の共和国でどのように適用されて、どのような問題を抱え、その問題をどのように克服しているかを、日本の政教分離と比較しながら学ぶ内容となっている。配付資料は以下の通りである。

### フランスはなぜ政教分離にこだわるの？ ——フランスの「ライシテ」をめぐる歴史——

講義名：ヨーロッパ社会論

担当教員：松井 真之介

授業内容：フランスの「政教分離」の歴史的背景を知り、日本の政教分離との違いを学ぶ

#### 1. フランスも日本も「政教分離」の国

- 日本国憲法第 20 条

「信教の自由は、何人に対してもこれを保障する。いかなる宗教団体も、国から特権を受け、又は政治上の権力を行使してはならない。何人も、

宗教上の行為、祝典、儀式又は行事に参加することを強制されない。国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない」

- フランス共和国憲法第1条

「フランスは不可分で、非宗教的で、民主的で、社会的な共和国である。フランスは、出身、人種、また宗教による区別なしに、全ての国民に法の下での平等を保障する。フランスは全ての信条を尊重する」

## 2. フランスの政教分離の歴史的背景

- 1789年の大革命がキーワード

- ・ 「自由・平等・友愛」がスローガン = フランスの「共和主義」の理念
- ・ フランスは「一にして不可分の共和国」かつ「国家」と「個人」の社会契約関係で成り立つ国とされた。

- ・ フランスの考える「個人」= いかなる属性にも関係なく、法の下に平等  
← この「属性」こそ、民族、地域、宗教などの「中間集団」

- フランスはこの「中間集団（コミュニティ）」を嫌う

- 市民革命の敵は国王だけじゃない！

- ・ フランス革命は脱カトリック教会の市民革命でもあった
- ・ 革命以前（旧体制下）は「国教」として、王権を支え国王と一体化していた教会
- ・ カトリック教会は公共分野——出生（洗礼）、結婚、埋葬、戸籍、教育、福祉、医療など——を担っていた → ● つまり教会 = 宗教 + 「役所 + 学校 + 病院」

- 精神世界だけでなく、世俗世界（日常世界）の支配機構でもあった。

- 脱王権のためには・・・

① カトリック教会の撲滅、追放

+ ② カトリック教会の無力化、脱政治化、国家管理下の必要

- 王政 VS 共和政の間のカトリック教会（19世紀）

- ・ 革命後、カトリック教会は国家管理下になったが・・・
- ・ 19 世紀フランスは王政（帝政） VS 共和政の時代
  - ☆ 革命（1789）、第一共和政（1792）⇒第一帝政（1804）⇒復古王政（1814）⇒七月王政（1830）⇒第二共和政（1848）⇒第二帝政（1852）⇒第三共和政（1870）

● カトリック教会は王政が復活するたびに力を盛り返した！

● 100 年以上かけて、政教分離法（1905）成立

● 政教分離の対象はもともとカトリック教会だった！

- 「教育」は国家と教会の主戦場
  - ・ 憲法（1791）で無償公教育の創設を明文化するが、公教育は結局カトリック教会に委ねられたまま
  - ・ J.フェリーの教育改革（1881-82）が転機：初等教育の義務化・無償化・非宗教化

● 100 年近くかけて、国家の教育分野独占が完成＝教育からのカトリック勢力排除が完成

ところが、この 100 年後に思いも寄らない展開に・・・

3. スカーフが国を揺るがした、通称「スカーフ事件」

- 1989 年、公立中学校で女子生徒 3 人がスカーフを着用しての入校を禁じられた事件
  - ・ スカーフはイスラームの女性の象徴とみられた
  - ・ スカーフ着用は、単なる校則違反？どころではなく・・・
- 世論を二分する国家的問題へ
  - ・ 着用反対派「フランスの『ライシテ』を脅かす行為である」「フランスの価値を守れ！」「学校は普遍・中立の場だ！」
  - ・ 着用賛成派「信教・表現の自由を奪うな！」「彼女たちの教育の権利を奪うな！」

● 結局、2004 年に「宗教的標章規制法」で実質禁止へ



#### 4. フランスの「ライシテ laïcité」とは？

- 「脱宗教性」と言われるフランス版政教分離
  - ・ 革命以来の「教会と国家の分離原則」←本来の対象はカトリック教会だった！
- 20 世紀末から「イスラーム」が対象に
  - ・ 2004 年に「宗教的標章規制法」で実質禁止へ
  - ・ 「公立学校における『特段に目立った』宗教的シンボルの着用を禁ずる」  
どうやら「目立たなければ」見逃すようだ・・・
  - ・ 1989 年以來ずっと議論されてきたが、2001 年のアメリカ同時多発テロ事件から議論が本格化
  - ・ 十字架、キッパ（ユダヤ教）、ターバン（シーク教）も等しく禁止

#### 5. 「政教分離」の何を重視するか？日仏比較

- 日本の政教分離
  - ・ 「政治（公的権力）は宗教に口を出さない」重視
  - ・ この問題には「『政教分離だから』、公立学校は個人の信教の自由に口を挟んではいけない」という図式が成り立つ
- フランスの政教分離＝「ライシテ laïcité」原則
  - ・ 「宗教は政治（公的生活）に口を出さない」重視
  - ・ 「『政教分離だから』、個人は公立学校で等しく（平等に）宗教を出してはいけない」という図式を採用した
- 自由を盾に、人によって権利行使のムラが出るのを見逃すか、平等を盾に、みんな少し我慢するけど権利行使にムラを出さないか  
ただ、目立たない範囲ですり抜けが可能・・・？

#### ③ 山川レクチャー

フランスにおける公用語、地域言語、個人の言語と国家との関係をレクチャ

一のキーワードである「ライシテ」と結びつけて考えることでワークショップ参加者に「言語の多様性」という新たな視点を授けるよう試みた。配布資料は以下の通りである。

## 国家の公用語とマイノリティが用いる言語の関係性

講義名：フランス語圏社会言語学

担当教員：山川 清太郎

授業内容：フランスの言語事情を掘り下げる

### 1. ライシテとは

- フランス共和国における「政教分離」のこと。
- 政教分離=政治(国家)と宗教(教会)を分離すること。
- 今回のケースでは「フランス公教育における政教分離」がポイント。  
例)：公立学校にはロザリオ持参禁止。(キリスト教・カトリック)・公立学校ではスカーフ着用を禁止に。(イスラム教)

### 2. 今回のケースでは

- 政治(国家)... 学校教職員
- 宗教(教会)... 一部生徒(とりわけ興梠由香里、斎藤絵梨、常磐さやか)  
政教分離=教職員は一部生徒の要求(宗教服装)を排除したい それぞれの立場で「「言語 <公用語と非公用語>」という枠組みで考えてみる。

### 3. 政治・国家側

- 政治・国家側:学校教職員 →フランス共和国における公用語を統一(実際の状況)
- フランス共和国憲法第 2 条 « La langue de la République est le français. » 共和国の言語はフランス語である。

→ よって、フランスの公用語はフランス語

#### 4. 宗教・教会側

- 宗教・教会側:一部生徒←マイノリティ

→フランス共和国における複数の公用語容認を所望

フランスにはさまざまな言語を話す人がいる。

- 地域言語... ブルトン語、アルザス語、コルシカ語
- アフリカの少数言語←旧植民地からの移民
- アラビア語←マグレブ(モロッコ、アルジェリア、チュニジア)からの移民など...
- 彼らにとってフランス語とは、公用語であり、学校教育がフランス語で実施されるため、フランス語が必要不可欠。
- 彼らのアイデンティティを表す「自らの言語」は政治・国家側から排除されている。  
→ 彼らはアイデンティティを示すため、自らの言語を「活用」
  - 地域で積極的に自らの言語を取り入れる(看板など)
  - コミュニティでのフランス語に自らの言語を織り交ぜる(語彙、文法)

#### 5. まとめ

フランス語以外の言語を話す人たちは

- 公用語であるフランス語を用いて生きていく社会に身を置く。
- 限定的用途(コミュニティなど)で自らの言語を取り入れることでアイデンティティを保つ。

#### 【IV. 作る作業】

ジグソー法によるグループ内共有の終了後、ワークシートを使用し、20 分

でプレゼン内容をまとめる。講師が各グループのファシリテーターを務め、メンバーがワークシートを画面共有し、全体の意見を記入する。これを使用することにより、レクチャーのポイントに関連づけ、各ステイクホルダーを納得させる方法を効率よく議論することができる。この作業の終了後、メインルームへと戻り、各チーム3分でプレゼンを実施し、質疑応答を行う。

Azunyan-Project 2020 <http://azunyan-project.com>

ワークシート グループ共有

	STEP 1	STEP 2
	レクチャーのポイントは？	各レクチャーを元に、①～⑤をそれぞれ納得させる提案を考えてください。
社会学 (松井)		
言語学 (山川)		
文学 (高橋)		

ワークシート グループ共有

## 【V. 総括、リフレクション】

講師（今回は代表の高橋）が本ワークショップとSDGsとの繋がりに言及し、Google フォームでのリフレクションを依頼する。

## 3. 成果と課題

本ワークショップでは、登場人物をステイクホルダーに見立て、全員の納得を得ることを目指すことを参加者に課した。ワークシートから、各レクチャーに基づく意見の例を転記する。

### 【高橋レクチャー（文学）】

由香里の服装は「ファッション性」、宗教は信じていないが親しみ→信者としての象徴にはならない。→「政教分離になっている」と説得。

【松井レクチャー（社会学）】

目立たなければ OK。宗教色を表面に出さず、お互いの文化を尊重する。①～③、⑤は OK。

【山川レクチャー（言語学）】

教室はダメ、登下校はダメ

課外活動は OK、休み時間は OK など

裏地は OK とか

以上の解答は、参加者が宗教色の禁止をいかにして許容するかという方向で一致している。すなわち参加者の思考は、一律の禁止による平等性ではなく、すべてのステイクホルダーが肯定感を得られるような意見を目指しているのである。レクチャーの影響を受け、ステイクホルダー全体の納得を考えることが可能となったという意味で、本ワークショップは ICP カンファレンス 2018 の時点から漸進したと言える。

しかし同時に問題にせねばならないのがリフレクションの回答の傾向である。

（リフレクション①）

人文学を学ぶことの意義を再認識できる内容であるとともに、学生が現代的な課題について主体的に考えることのできる面白い授業であったと感じた。

（リフレクション②）

途中で退出する予定でしたが、ぐいぐい引き込まれてつい最後まで残ってしまいました。刺激的な 90 分をありがとうございました。特に最初の松井先生の社会学の講義は 10 分間であれだけの情報を詰め込まれながらも色々と考えさせられ、うれしい驚きでした。日仏の政教分離の意味の違いには唸りました。ちゃんと勉強してみたいです。

（リフレクション③）

経験則ではなく、短いレクチャーの中から解決策を目指すという方法が魅力的でした。（私は高橋先生の文学のレクチャーをお聞きしましたが、非常に面白かったです）また、異なるレクチャーをブレイクグループの参加者が聞き、他

の人に伝えるというやり方も、個人を尊重しつつ個人に責任を与える活動だと感じ、興味深かったです。少し ABD(アクティブブックダイアログ) と似ているので、ブレイク中の共有ワークシートは各自が短い時間で書き込んでから他の人に伝えるというのもありかと思いました。

今回のような学際的、越境的授業が先生方と協働で作れたら…と夢が広がりました。ありがとうございました。

以上はすべてワークショップにおける教授法の革新性（物珍しさ）に向けられており、自身の周囲の社会状況や、実生活における改善点などへの言及がない。いわば参加者たちの現実世界における SDGs との結びつきや意識改善とは切り離されているのである。その意味で本ワークショップはこれのみで完結してしまっており、実生活の課題を見つめる考察へと発展していないと言わざるを得ず、SDGs 教育プログラムとして根本的な問題を有している。

改善方法として、リフレクションを利用し、「ワークショップを経た後、実生活の中で気づいたこと」などに思考を展開させることが挙げられる。加えて政教分離という特殊なケースだけではなく、今後日本で発生が予想される移民問題など、未来のことでありながらもより身近に差し迫る問題に取材したケースを使用することが有効ではないだろうか。今後の ICP カンファレンスにおいてはその改善案を試行する予定である。